

佐倉順天堂門人とその広がり

門人帳にみる門人とその史料をめぐって

土佐博文

Students of the Sakura Juntendo and Their Spread

はじめに

- ①『佐倉順天塾社中姓名録』にみる全国の門人のひろがり
- ②佐倉順天堂門人の史料をめぐって
- ③新出史料『順天塾姓名録』について
おわりに

【論文要旨】

蘭方医佐藤泰然によって佐倉本町に開かれた蘭医学塾佐倉順天堂には、日本各地から多くの塾生が集まり、その数は数千を数えたという。しかしながら、一部の有名な人物以外の全体像については必ずしも明らかにされていない。これは適塾などのように、全時期にわたってまとまった形で門人帳が残されていないという史料的制約によるものである。また、多くの門人名については村上一郎氏の著書『蘭医佐藤泰然』にも挙げられているが、出身地の記載がなく追跡調査には困難を伴う状況である。

そのような状況において、本稿では、一時期の門人の状況を示すものではあるが、門人の出身地が記載されたものとして貴重である、慶応元年閏五月の『佐倉順天塾社中姓名録』をもとにした門人の追跡調査の結果に基づき、詳細が判明した門人について紹介し、その全国的な広がりについて考察する。

また、調査によって門人の子孫の所在が確認できた、佐倉藩医で明治以降軍医とし

て活躍する西友輔と、明治期に官界で活躍する茨城県千代川村出身の塚原周造の関係を史料について紹介する。

最後に、調査の過程において塚原周造関係史料のなかからみつけた、彼が順天堂在塾中に作成したと考えられる『順天塾姓名録』について紹介する。これによって、従来知られている門人帳と比較検討してその分析を試みる。

はじめに

幕末期の天保十四年に下総国佐倉本町に蘭医佐藤泰然によって開かれた蘭医学塾「順天堂」に関しては、戦前から村上二郎氏によるすぐれた研究である『蘭医佐藤泰然——その一族門流——』がある。また戦後においては『順天堂史』上巻にまとめられている⁽¹⁾。

そのなかで、順天堂門人についての記載は、明治期の医学界において活躍した有名な人物についてのものがほとんどであり、全国各地において活躍した無名の人物についての記載はとぼしいものがあつた。

それは、順天堂には塾のまとまった形で門人帳が残されていないという史料的な制約によるものが多いと考えられる。村上氏の著作においては四一六名の門人名があげられているが、出身地についての記載がないために、その後についての追跡は難しい状況になっている⁽²⁾。

本稿では、数少ない順天堂門人帳、慶応元年閏五月に作成された『佐倉順天塾社中姓名録』⁽³⁾を手がかりに、全国各地の門人について考えてゆきたい。

①『佐倉順天塾社中姓名録』にみる全国の門人のひろがり

『佐倉順天塾社中姓名録』は、慶応元年閏五月に飯山藩の石田子常によつて記載されたものであり、九八名の門人名が記載されている。この史料は『順天堂史』で紹介されているが、明治以降有名になった門人についてはとりあげられている。その後、すべての人物について、『姓名録』に記載されている出身地に対して行った調査結果が、『佐倉順天堂門人調査中間報告』⁽⁴⁾として刊行されている。

調査結果の概要についてはこの報告書に記載されているが、門人の履

歴等を示す史料などについては報告書では詳しく述べていないので、ある程度について史料を見い出すことのできた門人で、『順天堂史』では取り上げられていない人物について紹介してゆきたい。

岩手県

〔奥州盛岡藩 梁田東州〕

明治十二年十月十五日に岩手県北閉伊郡岩泉に北閉伊郡病院を設立するとき、内務卿伊藤博文に出された伺書に医員のひとりとして経歴が書かれている⁽⁵⁾。それによると、陸中国東閉伊郡鉾ヶ崎村居住で四十三歳、安政三年陸中国横田村佐郷谷惣伯に従つて安政六年十一月まで三年一カ月の間洋法医学内科を修行した。さらに文久元年一月より武蔵国東京薬研堀の織田研寮のもとで元治元年十二月まで洋法医学内科を修行した。佐倉順天堂の佐藤舜海のもとでは慶応二年一月から明治元年五月まで二年五カ月間、洋法医学外科を修行している。のちに、明治五年九月から七年九月までは開拓使管下の札幌病院に勤務し、明治九年七月より十二年七月まで岩手県盛岡病院に勤務している。のち、西閉伊郡病院から、明治十三年四月に西閉伊郡横田村に設立された西閉伊郡病院の院長となっている⁽⁶⁾。

宮城県

〔仙台湧谷藩 角川淡斎〕

仙台藩伊達家の重臣で湧谷館主伊達安芸家中の医師として安政四年の分限帳に名前が見える角川朔庵の子と考えられる⁽⁷⁾。角川朔庵は湧谷立丁に居住し、知行高三貫一四三文を与えられており、長崎にて蘭人に西洋医学を学んで帰郷したという。角川淡斎は慶応四年の戊辰戦争時の会津進発軍に大番医のひとりとして名前がでている⁽⁸⁾。

群馬県

「上州宮崎 島田歸一」

学んだ医学塾名は不明であるが、明治十二年群馬県より内科、外科、種痘の開業免許をうけ、生家の宮崎（現群馬県富岡市宮崎）で開業している。⁽⁹⁾ 菩提寺である竜光寺の墓碑銘によると明治十四年に三十九歳で没している。⁽¹⁰⁾

「上州館林藩 朝枝誠軒」

明治二年の館林藩「中小姓分限帳」に履歴記載がある。⁽¹¹⁾ この史料によると、禄高は十五人扶持、薬種料金一両、薬学世話役務料金二百疋。じつは二本松藩丹羽左京太夫家中の石川藤四郎の子で、文久元年十月二十日に朝枝静庵の養子となった。文久二年四月二日に御番医師眼科見習として召し出されている。そして同年四月二十六日に蘭学世話務料として二百疋を与えられている。慶応元年九月二十九日に御番医師本席、慶応三年十一月一日に江戸において奥医師見習を仰せつけられている。この分限帳には順天堂にての医学修行記事は記載されていない。

栃木県

「野州足利 平塚五朔」

足利藩医平塚承啓の子で祖父は平塚承貞。祖父承貞、父承啓ともに佐倉順天堂の門人であるという。五朔は順天堂に学んだのち足利に賛生堂医院を開いた。⁽¹²⁾ 大正五年五月三十一日に六十六歳で没し、足利市巴町の法玄寺に葬られた。

茨城県

「下総猿島郡幸田新田 高埜鳳策」

明治期に茨城県飯島村に済生医院を開業した高埜周道の事と考えられる。慶応元年から明治三年まで順天堂に学んだ。ついで横浜にてヘボン

に学び、明治四年帰郷のち開業した。子孫の高野家では「順天堂方函」などの佐倉順天堂関係資料を所蔵しているというが、未確認である。⁽¹³⁾

埼玉県

「武州秩父 岩崎隆道」

武蔵国秩父郡下吉田村の医師岩崎玄貞の子。岩崎玄貞は秩父地方の西洋医学の先駆者である。⁽¹⁴⁾ 隆道は佐倉順天堂で学んだのち父の後を継いで医師を開業した。明治四年二月二十二日に岩鼻県より種痘御用掛を申しつけられ、村々を廻村している。⁽¹⁵⁾ 明治六年から明治十二年まで西吉田学校、棕宮学校の初代校長をつとめた。明治四十二年六月二十日に七十一歳で没した。⁽¹⁶⁾

長野県

「信州福島藩 馬嶋了達」

尾張藩福島代官所山村家の御医師を勤めた馬嶋松斎の子。「御家中系譜」⁽¹⁷⁾の馬嶋松斎の項目には「慶応二寅年二月三日、悴了達儀、総州佐藤舜海方江当寅年より二ヶ年医術修行願之通御免、御手当壹ヶ年金貳両御借上之割を以被下置候」とあり、慶応二年二月から佐藤尚中のもとで医術修行をしている記載が見られる。

「信州高遠在 橋爪隆斎」

明治十三年八月二十六日の自筆の履歴では、「安政二乙卯ノ二月ヨリ安政六乙未四月迄四年二ヶ月間、下総国佐藤舜海ニ随ヒ内外科并産科相学候」という順天堂入門の記載がある。また、安政六年四月より高遠において開業し、廃藩まで藩医として勤めていた。さらに明治七年五月二日から十三年六月三十日まで東京府病院備医を勤めていた。⁽¹⁸⁾

新潟県

「越後新潟在 榎並泰輔」

越後國中蒲原郡袋津村（現、亀田町袋津）の漢方医榎並玄泰の子。順天堂で学んだのち、帰郷して自宅に「主静堂」を開いて開業した。戊辰戦争時には新発田藩から徴収され従軍した。明治六年七月二十日に三十三歳で没し、菩提寺の円行寺に葬られた。⁽¹⁹⁾ 榎並泰輔の遺品として佐倉順天堂在塾時に購入したと考えられる解剖書などの医書や辞書が伝わっている。⁽²⁰⁾

福井県

「越前福井藩 大岩貫一」

福井藩医大岩本立の養子、福井県立図書館松平文庫中の史料に佐倉順天堂にて修行中の記事が「慶応元丑七月十三日、貫一佐倉表へ修行罷越居り候処当節柄難決之趣内達も有之候二付、格別之御評議を以右修行中月々金式両ツ、被下置」と見える。⁽²¹⁾

「越前鯖江藩 土屋裕道」

弘化二年七月十九日に鯖江藩医土屋得所の子として鯖江で生まれる。裕堂（堂）は号。文久元年江戸に出て大槻俊斎に学び、文久二年五月から順天堂で学ぶ。慶応二年四月十二日に無足席表医師に召し出される。のちまた順天堂に学び、慶応三年二月に帰郷する。⁽²²⁾ のちに土屋寛之と改名し、明治四年に長崎医学学校助教、明治八年に岐阜県医学学校校長兼病院長となる。官職を辞したのち、鯖江に土屋病院を開業した。

「越前鯖江 山岸良周」

鯖江藩医山岸良玄の子。文久元年十二月十四日家督。明治三年十月五日医学学校準副直となっている。⁽²³⁾

「越前府中藩 佐藤宗逸」

「府中本多家給帳」文化三年正月条に「礼式、子供、初而佐藤宗逸」

とあり、明治二年 正月の条には「奥医 佐藤宗逸」とある。⁽²⁴⁾

「越前勝山藩 木原逸斎」

『勝山藩古事記』⁽²⁵⁾ の木原大蔵の項目に養父として木原逸斎の名が出てくる。それによると、安政五年八月より元治元年七月まで大野藩医伊藤慎造につき医学を研究し、慶応元年六月より四年三月まで下総佐倉の名医佐藤爵海（舜海）に従い英国医学ならびに内外科研究、慶応四年四月より明治五年七月まで勝山藩医をつとめ、明治十六年十一月二十二日大阪にて三十九歳で客死した、と記載されている。

また、明治十三年の大津医学学校の教授として名前がみえる。この院長兼校長は同じ順天堂門人の村治重厚（謙造）である。⁽²⁶⁾

滋賀県

「江州膳所藩 村治謙造」

弘化三年十二月十二日に京都所司代与力神応轍の子として生まれ、のち膳所藩士村治家の養子となった。嘉永六年膳所藩の黒田行次郎に蘭学を、安政元年京都の医師秋元雲庵に医学を学んだ。文久元年大垣の江馬春齡に、文久三年から佐藤尚中に医学を学び、のち横浜でアメリカ人宣教師ブラウンおよびタムソンに英語を学んだ。

明治三年大坂医学学校に入り、卒業後は軍医となった。明治十二年退役して公立滋賀県医院長となった。明治十八年からは大津に開業した。明治二十一年四月に設立された滋賀県下連合開業医師組合会（後の滋賀県医師会）組合長に選出された。

明治二十四年五月十一日の大津事件で、ロシア皇太子を襲った巡査津田三蔵の手当てをしたことでも知られている。大正五年十二月二十一日没、大津市の陸軍墓地に葬られた。⁽²⁷⁾

大阪府

「泉州伯太藩 西永隆甫」

伯太藩士名の記録である「藩士兵卒員数并従前之禄扶持米取調帳」⁽²⁸⁾に「米十石三人扶持 西永隆甫」という記載がある。

島根県

「雲州松江藩 清水恭蔵」

松江藩医清水謙益の子。清水家は代々松江藩医で恭蔵で七代目。文久三年十月江戸に登上り、伊東玄朴、松本良甫、佐藤尚中について慶応三年八月まで西洋医学を修めた。松江藩校修道館に西洋医学学校が開設されるときに呼び帰されて、藩立殿町病院に勤務している。明治九年八月二十八日に松江公立病院院医に任命された。⁽²⁹⁾子孫は現在も松江市内で開業している。

岡山県

「備中 千原貫一」

医師千原英舜の長男として天保七年八月十四日生まれ。十二歳で緒方洪庵に入門し、その後江戸で医学修行し、慶応二年帰郷して開業した。屋敷内に庚申堂を勧請して、「養生湯」という平屋一棟を建て宿泊医療を行った。明治二十七年四月七日に没した。⁽³⁰⁾弟の千原卓三郎も緒方洪庵に学び、明治八年堺の県立医学校教諭を勤めた。

「備中 山鳴真平」

山鳴弘斎の子として生まれた。祖父の山鳴大年は長崎で医学を学び、築瀬村（現在の岡山県後月郡芳井町築瀬）で開業した。この地でいち早く種痘をしたことでも知られている。

父の山鳴弘斎も養父の跡を継ぎ医学を学んだ。足守の除痘館で緒方洪庵が種痘を実施したさいの一員として名前がある。

真平は儒学を阪谷朗蘆の興讓館に学び、医学を順天堂の佐藤舜海に学

んだ。明治元年十二月七日、父の死のため佐倉からの帰郷途中で福山にて没した。享年二十六歳。⁽³¹⁾医業を継いだ弟の山鳴誠三郎も順天堂門人として名前が見える。⁽³²⁾

広島県

「備中 窪田賢三」

「姓名録」の記載では備中となっているが、正しくは備後国安那郡粟根村金剛地（現、福山市加茂町粟根）の出身である。阪谷朗蘆の興讓館で儒学を学び、順天堂、大学東校で学んだが、明治五年九月二十一日卒業をまえにして病没した。⁽³³⁾

兄の窪田次郎も安政五年頃の順天堂門人であり、明治期に教育、民政、政治の分野で活躍した。⁽³⁴⁾

「備後福山藩 緒方靖平」

福山藩医の緒方家につながる人物と考えられるが詳細については不明。明治二年の「役人帳」⁽³⁵⁾に、「五人フチ 緒方靖平 三十二」と名前がみえる。また、福山に医学校兼病院である「同仁館」が設立され、そのなかで「調合方」として名前が出てくる。

熊本県

「肥後熊本 田代文基」

代々熊本藩医を勤めた田代家の十三代目として天保十二年生まれた。初め藩の医学所である再春館で漢方医学を学んだ。元治元年五月藩命により江戸に留学し、名倉知新およびその弟の名倉知文のもとで学び、のちに佐倉順天堂にて佐藤尚中に学んだ。慶応三年八月に帰郷して中小性外様御医師として藩に仕えた。明治元年藩命により大坂に出て、大坂医学校にてボードインに学び、明治四年に帰郷した。帰郷後は古城病院医学所及び病院教導となり、教師として招かれたオランダ人マンズフェル

トの口述を翻訳して生徒に教授した。明治九年公立通町病院長、明治十年の西南戦争後は、公立北岡仮病院長として医務に従事するとともに、熊本県下の医事衛生に尽力した。

明治十三年五月地方衛生会委員、明治十九年鮑田郡衛生会（後に医学会）会頭、明治二十三年四月熊本県医会幹事、鮑田郡支会頭となり医師の組織結成に尽力した。明治四十一年一月二十七日に没した。⁽³⁶⁾

以上、『佐倉順天塾社中姓名録』に記載された門人について、出身地から回答いただいた情報で、経歴や資料の所在が判明した人物について紹介してきた。調査にあたりご協力いただいた門人の出身地の諸機関に感謝したい。

本稿では史料などの所在情報をまとめたのみであるが、今後は史料の所在などが判明した門人について、現地での調査をすすめて具体的にあらわかにしてゆきたい。

② 佐倉順天堂門人の史料をめぐって

『佐倉順天塾社中姓名録』に名前が記された門人二名「西友輔」及び「塚原周造」について、調査により子孫宅に伝わる史料を確認することができた。順天堂門人に関係する史料についてはいままでもあまり紹介されたことがないと考えられるので、以下で調査した史料について紹介してゆきたい。

(1) 西友輔とその史料

『佐倉順天塾社中姓名録』に塾頭として出てくる人物に佐倉藩医西友輔がいる。西家は初代西淳甫命光が藩医として召し抱えられた家であり、以後、善長―淳甫―友輔と続く家である。

佐倉藩堀田家中の武士の履歴を集めた「保受録 家老以下新番格迄」⁽³⁷⁾の記載によると、友輔の父淳甫は漢方の藩医である北村玄寿の弟で、西家の養子となった。天保十年十月二十七日に西洋書の研究を命じられ、さらに天保十二年二月二十七日には佐倉藩医で蘭医鐫木仙庵とともに長崎での蘭学修行を命じられている。そして天保十三年十一月に長崎から江戸に帰ったのち、藩医として活躍し、嘉永二年二月二十三日に藩の医学所都講となっている。万延元年七月九日に亡くなった。ちなみに、西淳甫は佐藤泰然訳の「模私篤牛痘篇」の校訂者として名前が出てくる人物である。⁽³⁸⁾

西友輔は西淳甫の長男として天保十二年八月三日に生まれた。⁽³⁹⁾「保受録」によると、安政六年十一月一日に藩校において小学、孟子の講義が済んだあと、安政七年正月十六日に蘭方医学修行のため三年間佐藤舜海に寄宿修行を仰せ付けられている。万延元年八月二十九日に亡父淳甫の跡式二十人扶持を相続し、給人医師を仰せ付けられている。また、慶応二年の佐倉藩医制改革によって三等医師となっている。⁽⁴⁰⁾西友輔については、彼自身が書いた履歴がありその概要を知ることができる。⁽⁴¹⁾

〔史料一〕

履歴

西友輔 実名 文

通称 友輔

一 生誕 天保十二年辛丑八月十三日 長男

一 住居 千葉県下総国印旛郡佐倉宮小路町

一 旧藩 佐倉藩主堀田相模守正倫

一 禄 貳拾人扶持、給人医師

一 父 西淳甫 鳳ニ西洋医学ヲ志シ、天保十二年藩主ノ命ヲ奉シ長崎ニ至リ和蘭学及ヒ内外科医術ヲ修メ、帰藩ノ後洋法医術ヲ藩内ニ開ケリ、母ハ同藩医師串戸祐昌名ハ長

一 藩学成徳書院ニ入り漢学ヲ受ク、同藩侍医佐藤尚中ニ従ヒ蘭学並ニ内外科医術ヲ修ム

一 明治元年六月藩兵ニ従ヒ上総国佐貫ニ出張ス、明治五年二月陸軍ニ出身シ、同月二十四日被任二等軍医副、東京鎮台一番大隊附属被申附、同年八月十九日東京鎮台第四分営出張被申附、同年十一月十日被任一等軍医副、明治六年一月二十六日東京鎮台第七番大隊附属被申附、同年三月十五日東京鎮台第七大隊附属如旧水戸表出張被申附、同年三月三十日東京鎮台宇都宮営所出張被申附、同年十一月二十四日帰京被申附、同年十二月二十二日東京鎮台第一聯隊第一大隊附属被申附、明治七年一月十九日被任陸軍軍医副、同年七月十三日被陸軍軍医、同年十一月八日被叙正七位、明治八年一月二十二日第一軍管徴兵使随行使被仰付、同年六月十六日戸山学校附被仰付、同年十一月二十七日陸軍本病院第二課出仕兼勤被仰付、明治十年三月二十一日戸山学校附被免本病院第一課出仕被仰付、同年十一月二日本病院第一課出仕被免、熊本鎮台病院第一課出仕被仰付、同年十一月二十二日鹿児島出張病院江被差遣、鹿児島軍団病院ノ残留患者ヲ処置シ、十一年一月同院引揚ニ付熊本ニ帰台ス、明治十一年一月二十六日熊本鎮台病院第一課出仕被免本病院第一課出仕被仰付、軍医総監ノ命ニ由リ帰途長崎ニ至リ同県病院ニ依託セル西南役ノ負傷患者ヲ処置ス、同年五月十一日本病院第一課出仕被免広島鎮台病院第一課出仕被仰付、同年七月十一日広島鎮台病院第一課出仕被免同院第三課長被仰付、明治十二年一月十四日第五軍管徴兵検査医官被仰付、同年一月二十日広島鎮台病院第三課長被免同院第一課長被仰付、同年八月四日御用有之広島県下佐伯郡厳島ニ被差遣、明治十三年九月七日広島鎮台病院治療課長心得被仰付、明治十五年五月十日被任陸軍二等軍医正、同年五月十

一日広島陸軍病院治療課長更ニ被仰付、同年六月十日広島陸軍病院治療課長被免、熊本鎮台歩兵第十三連隊医官兼熊本陸軍病院往診課長被仰付、同年六月三十日被叙従六位、同年八月十一日旅団ニ編入シ筑前博多へ出張ス、同年十二月廿五日被叙勳五等賜双光旭日章、

この史料によると、西友輔は順天堂の佐藤尚中のもとで学び、廃藩置県後の明治五年に陸軍に出仕している。その後、主に九州の陸軍病院に勤務したという、いわゆる軍陣医学に従事している。陸軍を退官したあと、東京牛込に全生堂病院を開業して地域医療に尽力したのち、明治二十九年八月二十九日に亡くなり、青山霊園立山墓地に葬られている。

西友輔の孫である故西稔氏の妻である西美江氏のもとには、数は少ないものの医学書を中心として、藩医であったことをしのばせる史料が残されている。以下で紹介してゆきたい。

① オランダ語で書かれた資料

“Hoorden Boek”

和紙に書かれたオランダ語の辞書である。奥付に西友輔の父である西淳甫の署名が“Nisjunpo”と記されていることから、西淳甫がオランダ語の学習のために作成したものと考えられる。⁴²⁾作成年代は不明であるが、西淳甫が佐倉藩から西洋書研究を命ぜられた天保十年から、鑄木仙庵とともに長崎留学を命ぜられた、天保十二年前後のものと考えられる。

取りあげられている語彙としては、「知覚」「呼吸」「腕」「葉」などの人体や医学に関する用語が多く見られる。鳥井裕美子氏のご教示によれば、たんなる『ドゥーフハルマ』の写しではないとのことであった。また、語彙もアルファベット順に並んでいるわけではないので、他の辞書との比較検討も必要であるとのことであり、今後の詳細な検討が課題である。

また、この辞書の巻末に「丈ハ蛇矛排玉門縦横当処怒風翻数番挑戦血流汗這裏唯聞口内喊喧」とあり、この辞書を作成するにあたっての西淳甫の苦勞の様子をうかがうことができる。

“Beschryfende Scheikunde, van het Bewerktuigde en Onbewerktuigde stoffen. door”

この書物は洋紙に書かれており、装丁も洋装である。筆者はオランダ語については無知であるため、鳥井裕美子氏にうかがったところ、ポンペの化学（有機物、無機物）の講義録であるとのことであった。オランダの軍医ポンペは長崎にて松本良順や佐藤尚中などにすぐれた医学教育を行った人物として有名である。ポンペの講義は医学のみならず物理学、化学などにも及ぶものであったが、化学の講義録は未確認とのことである。内容の分析については、今後の調査や研究に待ちたいと思う。

この講義録は、西友輔が師である佐藤尚中から引き継いだものかもしれないが、確証がもてる史料が得られないため、推定するにとどめておきたい。

② 訳書

『孔夫子伝』

この書は奥書に「泰西紀元千八百二十二年 和蘭紐宛波以斯著皇国安政四年丁巳年夏五月 佐倉巖淵鐵太郎訳」と記されたものである。内容から孔子の伝記ということがわかる。著者の「紐宛波以斯」（チュエハイスカ）については不明であるが、訳者の巖淵鐵太郎は佐倉藩士であり、蘭学を学びのちに蕃書調所の教授手伝にあげられた人物である。「保受録 徒以下末々迄」⁽⁴³⁾の記載によると、嘉永七年閏七月十五日に藩より西洋学修行を仰せつけられ、向三年間江戸にて手塚律蔵に入門し、安政四年九月七日、安政五年七月二十九日、安政六年二月七日にはさらに一年宛修行の延長を仰せつけられている。都合六年間手塚のもとで西洋学を学んでいた。そして万延元年十一月二十五日には藩から西洋学世話

を仰せ付けられて藩校にて藩士たちに教授している。このことから、この訳書は江戸の手塚律蔵のもとで西洋学を学んでいる時に訳したものであることがわかる。岩淵鐵太郎と西友輔との関係は明らかではないが、同じ佐倉藩にて蘭学を学んだということでは交流があったのかもしれない。

『埋仏利児解剖書 婦人生育器什篇 膀胱篇』

この書は「箕作先生訳」と表紙に記されている婦人の生育器に関しての解剖書である。箕作先生とは箕作阮甫の事と考えられ、同様の訳書の類例は確認できないとのことであった。ただ、著者の「埋仏利児」とはフランスの「末弗利而（Mayguir）」にあたるのではないかということであった。この人物の著書については、箕作阮甫の蘭語からの訳書が慶応大学の所蔵であるということである。⁽⁴⁴⁾

『紅毛外科油集 龍』『紅毛外科集 紅毛和解集 麟』『紅毛金瘡仕掛 紅毛拾七伝 龜』

年代や著者は不明であるが、内容は薬についての処方を書いたものである。

③ 西友輔の編纂書

『医語類纂 解剖薬病名之部』

明治二十四年五月に脱稿したもので、全生堂主人によって編さんされたものである。全生堂とは、西友輔が東京牛込山吹町に開業した病院である。

以上紹介してきた史料は、佐倉順天堂で蘭医学を学んだ西友輔の子孫宅に伝わったものとして貴重なものと考えられる。残念ながら、オランダ語や医学については全くの門外漢である筆者の力量不足のために詳しく紹介できなかった。今後、オランダ語や医学に造詣が深い方にご協力をいただき、内容などを解明できたらと考えている。

(2) 塚原周造関係史料

『佐倉順天堂塾中姓名録』の記載に「下総砂子 塚原周造」とある。この塚原周造は医者ではなく、明治期に運輸、通信省の官僚として生きた人物である。塚原周造については、鈴木秀幸氏により学問形成期のことが紹介されている。⁽⁴⁵⁾彼の出身地である下総砂子とは、現在の茨城県結城郡千代川村大園木にあたり、砂子とは小字名である。

彼の伝記として『塚原夢舟翁』という本が刊行されており、その履歴を知ることができる。⁽⁴⁶⁾塚原周造は弘化四年に四月二十日に塚原忠兵衛の子として生まれた。地元の千葉金峰や益見淡洲に漢籍を学んだ後、元治元年に佐倉順天堂に赴き佐藤尚中に入門している。⁽⁴⁷⁾

彼が佐藤尚中に入門するにあたっては、彼の日記の元治元年十二月十二日の条には「朝出酒々井到佐倉、訪佐藤先生門人千原勘市出而揖讓進退、余偷乞為門終帰」と記載されており、佐倉の佐藤先生（佐藤尚中）の門人の千原勘市を訪ねている様子かわかる。千原勘市は、「佐倉順天堂塾中姓名録」に「備中 千原貫一」と出てくる人物である。⁽⁴⁸⁾順天堂の入門にあたって、門人が関わっているという興味深い事例である。ただ、千原貫一とどのような経緯で知り合ったのかは不明である。

1 順天堂在塾中の日記「葩志梅」

塚原周造が正式に佐藤尚中に入門したのは、元治二年四月十四日のことである。この時期の彼の日記「葩志梅」が残されており、順天堂への入門や蘭学を学んでいる様子が記述されている。⁽⁴⁹⁾日記には入門以降元治二年六月十二日まで約二カ月にわたる記載が続いている。

以下、順天堂在塾時の塾生の具体的な生活がわかる数少ない史料であるため、順天堂在塾中の部分について紹介する。

〔史料二〕

元治二年 葩志梅 日籤 誠求堂（茨城県結城郡千代川村大園木 塚原宏一家文書）

（元治二年二月）

十五日 辛巳 陰或雨少有之

朝出小貝村渡蚕、水航利川、杭幡湖於瀬戸村至佐倉、訪 佐藤先生、遂宿大黒屋夜安藤 君坐譚、余与知己、何個□□□□□□

十六日 壬午 陰或雨

出佐倉至山王宿丸屋

佐倉藩命駕徒卒等押来僕持預□宿丸屋

（中 略）

（四月）

十一日 乙亥 晴

出砂子邨向成田桜城、卒藤蔵川岸宿新 亀楼

十二日 丙子 晴

碁成田山到佐倉城詰入塾之故夜岡本先生来面謁寮大黒楼

十三日 丁丑 陰或晴風緊

先生上総行事不談譚待明朝 入塾父子供与謁先生

十四日 戊寅 陰欲雨

十五日 乙卯 晴

家大人帰郷、始読蘭字、夜学

十六日 庚辰 晴

同読

十七日 辛巳 晴風雲

頻誦難成

十八日 壬午 晴風日中夜乃至天明

同

十九日 癸未 陰風劇雨交of晴

同

六月							
一日	癸酉	晴陰	休日				
二日	甲戌	雨陰或晴	勉強				
三日	乙亥	晴	於大黒屋施手術				
四日	丙子	晴	情愁 夜不能眠				
五日	丁丑	晴	同				
六日	庚寅	雨	同				
七日	辛卯	雨	同				
八日	壬辰	雨	休日				
九日	癸巳	雨	寮於大黒屋				



写真1 「葩志梅」(茨城県結城郡千代川村塚原宏一家文書)

十日 甲午 雨 勉強

十一日 乙未 朝来暫晴 会

十二日 丙申 晴 帰省、拝尊親姉兄

この日記によると、周造は入塾前の元治二年二月十五日にいったん佐倉を訪れて大黒屋に宿をとり、かねてよりの知己である「安藤君」と会って談じている。安藤君とは『佐倉順天塾社中姓名録』にでてくる「志州鳥羽藩 安藤堯民」のことと推定されるが、いずれにしても順天堂の門人から事前に様子を聞いていたのであろう。

それから二カ月後に順天堂入塾のため佐倉を訪れ、塚原周造は入塾に際して、四月十二日に「岡本先生」に挨拶をしている。岡本先生とは、『佐倉順天塾社中姓名録』に塾監として名前が出てくる岡本道庵のことであろう。この岡本道庵はのちに佐藤尚中の養子になり、佐藤舜海と改名して佐倉順天堂を継ぐ人物である。そして、上総行きにより不在であった佐藤尚中には四月十四日に父とともに面会して入塾をしている。そして次の四月十五日に「始読蘭字」とあるように、このときから塚原周造の蘭医学修行が始まったのである。

順天堂塾生の在塾中の生活については、佐倉順天堂の佐藤進による回想がある。⁽⁵¹⁾また、『佐倉順天塾社中姓名録』の後半には、慶応年間の順天堂の医学教育の内容について記されている。その内容は、先生である佐藤尚中の原書講義が一日おきに午前中にあり、また外科の各種講義が門人会頭などにより分担して講義された様子がわかる。それは科目によつて講義が行われている日が決まっていたということは従来知られていた。

この日記には元治年間の順天堂塾における具体的な生活や勉学の様子が記録されており、約二カ月間という短い期間ではあるが、一塾生の勉学の様子がうがえる興味深い史料である。日記のなかには「勉強」「夜学」という言葉が毎日のように出てきて、蘭医学を学ぶ一青年の意気込

みを感じとることができる。

また、一週間に一日定期的に「休日」「ゾンタク」⁽⁵²⁾という記載がある。これは当時の蘭学塾に特徴的なことであろうか。このときは他の塾生とともに出かけたりしている様子も記されている。五月十一日のゾンタクの時には、神谷、山鳴、朝枝の三名の塾生と小林亭で遊んでいる。この三名とも『佐倉順天塾社中姓名録』に出てくる「濃州岩村藩 神谷宗元」「備中 山鳴真平」「上州館林藩 朝枝誠軒」のことと考えられる。

佐倉順天堂の医学教育においては、先生である佐藤尚中の講義のみではなく、実際に患者の手術をみて学ぶという特質がある。また、手術などの治療は順天堂がある佐倉本町界隈の病人宿でおこなわれていたとい⁽⁵³⁾う。日記には「於吉野屋先生切女岩腫」「於大黒屋施手術」という記載があり、吉野屋、大黒屋という病人宿とみられる場所が記載されている。特に大黒屋については、塚原周造が宿泊している様子が日記の記載からうかがえることから、寄宿修行ではなかったようである。

以上でみてきた塚原周造の日記は記された期間が短いものの、順天堂塾生の在塾時代の様子を知ることのできる貴重な史料といえるだろう。今後、他の門人の記した日記等の記録の発掘によって、順天堂門人の日常の活動が解明されてゆくことを期待したい。

2 「順天堂日用方函」

また、塚原宏一家文書のなかには『順天堂日用方函』という文書がある。「方函」とは薬の処方集、薬剤書である「方鑑」⁽⁵⁴⁾のことである。これは順天堂における薬の処方をする文書である。この文書の裏には「下総砂子 誠求堂」と塚原周造の日記と同様に記載されており、周造が順天堂在塾時に写したものと考えられる。

内容は清解剤の製法からはじまり次のような薬の処方が記されている。
内用剤

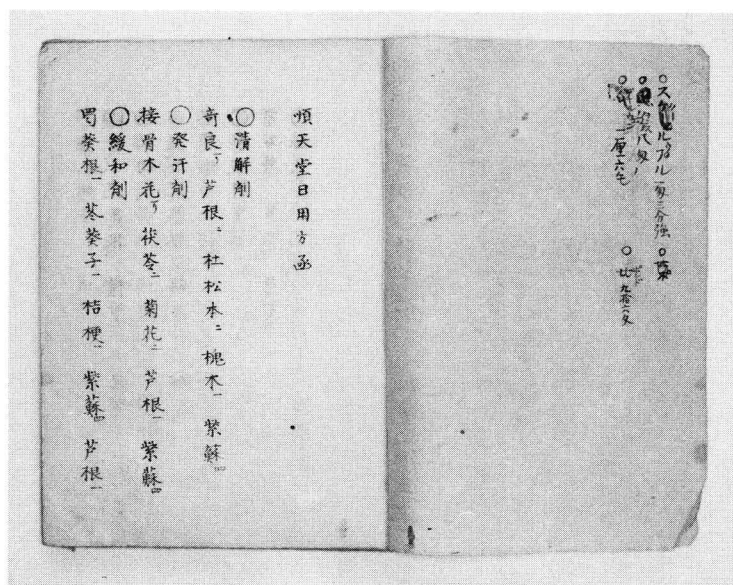


写真2 『順天堂日用方函』（茨城県結城郡千代川村塚原宏一家文書）

発汗剤、緩和剤、強壯剤、衝動剤、解凝剤、滋養剤、常用神経剤、
壯神飲、常用下剤、麻屈里、清血剤 モスト、驅衆剤、郊盾剤、
利尿剤、梅毒奇効湯、清暑湯、

外用剤

接骨花零気、温乳汁、葦沃私葉、緩和蒸剤、収剣含漱剤、衝動剤、
稀釈含漱剤

丸薬之部

万金丹

細末糊丸

将王丸、排毒丸、双求排毒丸、桂鉄丸、单丸求丸、鳩求丸、三味

梅毒丸 オンセノフルト、独尊地丸、福布満猛求丸、奇痘丸、
救命丸家法、牛胆丸、石炭油丸、吐蒲丸、失越丸、金松丸、常用
驅虫丸、莖求驅虫丸、憐魏丸、

散薬之部

制酸散、治癰散、又方、金求散、加金酸、古方陀弗兒私湯、陀款
兒私散 ヤン先生新方、鎮吐散、越盾屋布斯密醒刺列、齒磨散、
輪虫散、蓬砂 ポートル、氷蓬散、暇製食塩、赤降求、

水薬之部

梅毒丁哉、底電癒瘡水、又方、阿芙蓉丁剂、黄金水、清涼飲 ポ
ツテリヘフー、癒瘡水、石灰水、赤降水 オンセノフルト法、
没菜丁剂、芸香水、頭瘡癒テ后収飲洗薬、治麻拔兒撒、竜腦精、
痘瘡水 ウラットワートル、実青丁剂、硝砂加石灰精、

護刺兒度、新法民至列里精、銘覚醒、鉛醒略方、消酸銀水、健胃
丁幾、格別□預防、皓垂水、舛垂水、糖垂水、单垂水、福布満水、
竜銘水、神驗水、緩和収飲水、蓬芦水、二吞水、嶮砂神効水、消
盤水、排膿毒収飲水、消酸銀水、瘍防水、止膿水、丹毒膿防水、
三味収飲水、垂銘花水法、

眼膏之部

单垂銘花膏、赤鉛膏、銀竜膏、梅毒膏、痛風膏、硝酸膏、硝酸銀、
失赤膏、仮綸霜、華醒膏、除翳膏、赤阿膏、赤蓉膏、清酸銀膏、
蓬砂膏、白降膏、

膏薬之部

水銀軟膏、鉛膏、君王膏一方、君王膏二方、代指塗薬、水銀病二
用ユル膏、神効石製 方、吐潤石膏、

製法之部

薄荷油製法、石灰水 舍利別等分、又方、保元丹、口中塗承、亜
迹多亜舍利別、アントラコカリ、ニーニト膏方、

外用之部

温瘡石鹼膏、又方モスト、ハンサムオボテルトフ、顔面承、印囊
欣衡塗摩剤、癰疽ヲ治スル撒布膏、安多古加里製法、沃実醒丁籤
チンキチラオジー四維、ヒドリオダスポットアス軟膏、舎民ハル
サム膏、コメス散膏、

この史料で処方があげられているものの中には、蘭方による薬の処方とは言い難いものもあるが、モスト、ワートルなどの医薬書を参考にしたと考えられる製薬法も記載されている。塚原周造が順天堂で西洋医学を修行した当時の薬の処方を行うことができる史料である。

③新出史料『順天塾姓名録』について

順天堂門人塚原周蔵の關係史料のなかに、『順天塾姓名録』（以下『姓名録A』と略）という文書がある。⁽⁵⁵⁾この史料に年代は記載されていないが、塚原周造が順天堂に在塾した元治二年に作成したものと考えられる。順天堂の門人帳としては、慶応元年閏五月『佐倉順天塾社中姓名録』（以下『姓名録B』と略）がこれまで唯一のものとして知られていたもので、この門人帳は新出のものといえるだろう。

この文書は罫紙八枚を綴った縦帳であり、表紙に『順天塾姓名録』と記されている。まず表紙裏に「舜海佐藤先生総州小見川之人」とあり、下総佐倉藩の西友輔を筆頭に九十六名の門人名が出身地とともに記されている。

〔史料三〕『順天塾姓名録』（茨城県結城郡千代川村大園木 塚原宏一家文書）

（表紙）

「順天塾姓名録」

舜海佐藤先生総州小見川之人

順天塾姓名録

下総佐倉藩	西友輔
同藩	三好隆玄
同	吉村陽庵
同	飯塚信庵
同	岡本道庵
同	小田舜泰
武州秩父	岩崎隆道
越後長岡藩	長谷川泰一郎
三河安城村	中根退藏
上州館林藩	森松道甫
相州小田原藩	鈴木隆斎
志州烏羽藩	安藤堯民
羽州米沢藩	磯野恒徳
備中	千原貫一
越前福井藩	山本淳良
同	蘆野三省
讃岐高松	森里謙造
上州	小林良斎
三州刈谷藩	浅井恭甫
越前府中藩	渡辺静寿
同	佐藤宗逸
丹羽笹山藩 ^(渡)	渡辺万治郎
肥前佐賀藩	永松東海
同藩	相良元貞
越前大野藩	中村 斎

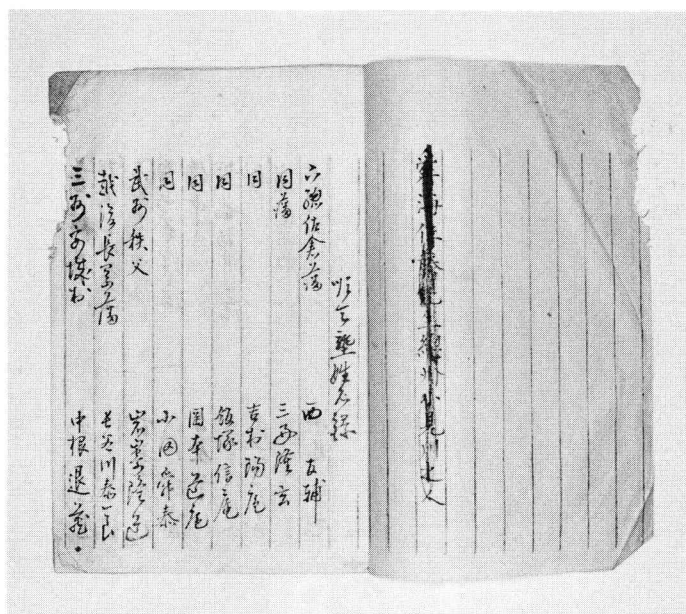


写真3 『順天塾姓名録』（茨城県結城郡千代川村塚原宏一家文書）

同	土田禮造
越後ヲチヤ	木村東民
奥州森岡藩 ^(盛)	梁田東洲
同	佐郷谷沖琢
上総飯野藩	海津昌哲
泉州太伯藩 ^(伯太カ)	西永隆甫
下総佐倉藩	島田綱助
上州足利	平塚五朔
武州広瀬	横田隆碩
越前福井藩	大岩貫一
同	妻木立斎

同	野村信平
同	勝澤一字
備後	窪田賢三
羽州庄内藩	榊原玄辰
濃州岩村藩	神谷宗元
下総佐倉	和田栄軒
備中	山鳴真平
越前福井 ^(マ)	星野道の
江州膳所藩	村治謙造
駿州	朝川濤平
駿州	大野静庵
伊豆網代	相磯敬三
上州館林藩	朝枝誠軒
上総	海保春造
三州浜松	近藤鼎
甲州吉田	渡辺甲太郎
雲州松江藩	清水恭徳
野州足利	豊島方斎
備後福山藩	緒方靖平
信州飯山藩	石田松庵
伊予松山藩	田中良弼
肥後熊本藩	樋口立卓
上州宮崎	島田帰一
上州	仁木坦道
奥州会津藩	佐藤真蔵
越前勝山藩	木原逸斎
奥州会津藩	田中春台

紀州熊野	熊野	竹之内主殿
奥州松前	長内厚篤	
伊予松山	岡田大同	
濃州		
濃州大垣新田藩	笠原兵衛	
日州佐土原藩	梶原鉄之助	
同藩	検本春策	
越前勝山	三 善民	
濃州大垣新田藩	南条良甫	
丹後田辺藩	奥村 斎	
下総古河藩	小川桐斎	
遠州横須賀藩	川口戊斎	
「以下異筆」		
上毛金山麓太田之人	塚越良三	
加州藩	林 久馬	
江府下谷住人	古山亮字子	
	通称□□	
加州藩	坂井惣太夫	
若州藩	井汲新太郎	
彦 根	脇 力	
庄 内	大井英之助	
阿州藩	竹中銀之進	
江 都	河合詮吉郎	
若州藩	井坂静太郎	
	正名	
武州杉戸	菅原寿喜代	
江 都	河 亘	

以上記載されている人物の名前や出身地については、『姓名録B』の記載と共通している者が多い。ただし、記載の順番や名前に若干の違いがみられる。『姓名録A』は、慶応元年閏五月のものであり九十八名の門人名が記載されている。『姓名録B』は、塚原周造が順天堂に在塾していた元治二年のものと考えられる。人数もほぼ同数であり、順天堂塾において同系統の門人帳を写しとったものと推定される。

『姓名録B』は石田松庵の関係者と考えられる飯山藩の石田子常によって子孫に伝わったものと推定されているが、『姓名録A』は塚原周造という門人の子孫宅に伝わったものという共通点もある。

それぞれの姓名録の記載の仕方を比較してみると、『姓名録B』のうち最初の七十九名の門人名は楷書で書かれており、後半の残りの門人名は異なった字体で書かれている。これらは、順天堂に備えてあった門人帳を写し取った石田松庵、塚原周造が在塾中の新しい入門者を記したものと推定される。

楷書で書かれている部分については『姓名録A』の人名とはほぼ一致している。双方の門人帳とも後筆と考えられる部分には共通する人名がない。

今回見つかった『姓名録A』の十二名の門人については、新たな順天堂門人と考えられる。これらの門人十二名について、出身地として記載された地域に照会してわかった結果は次のとおりである。

「上毛金山麓太田之人 塚越良三」

明治二十年一月に多田元吉の撰文により一族と考えられる塚原久太郎⁽⁵⁷⁾によって建てられた「塚越鈴彦ノ碑」に経歴が刻まれている。その記載によると、弘化二年三月七日に上野国新田郡太田村に塚越弥兵衛の次男として生まれた。通称を寅之助、良三、のちに鈴彦と称した。幼時より学問を好み、十六歳で江戸に出て漢学を学んだ。続いて横浜

で英学を学び、明治元年八月に若狭小浜藩に英学教授として招かれ、三十五石を給わった。明治三年五月に米国に渡り化学と商学を学び、明治六年九月に帰国した。同年十一月国債寮十等出仕、明治七年二月に租税寮関税局に転じ、明治十一年七月には大蔵三等属に任ぜられた。そして明治十五年二月には検査課長となった。明治十九年三月十日に四十二歳で病死し、東京谷中天王寺に葬られた。⁽⁵⁸⁾

残念ながら碑文では佐倉順天堂に学んだ記録は確認できないが、江戸に出て学んでいる時に佐倉順天堂の門をたたいたのかもしれない。

「加州藩 林久馬」

加賀藩士と考えられるが不明。

「江府下谷住人 古山亮宇子」

不明

「加州藩 坂井惣太夫」

加賀藩士と考えられるが不明。

「若州藩 井汲新太郎」

若狭小浜藩士に井汲家がある。幕末期の「小浜藩家臣由緒書」⁽⁵⁹⁾によると、井汲家の六代目として、元治元年五月に六十二歳になる井汲六左衛門直養と、同年に三十二歳になる総領の井汲熊太郎直正の名前がみえる。この史料には惣領の記載しかないために井汲新太郎の名前は見えないが、この一族であろうと推定される。

「彦根 協力」

彦根藩士の履歴を集めた「侍中由緒帳」二十五によると、協力は彦

根藩士脇源太兵衛家九代目の脇忠重の養弟として名前がでくる。そして、慶応二年二月十五日に洋学修行のため江戸行きを仰せつけられている。また、明治四年の「彦根藩士戸籍簿」⁽⁶¹⁾には、協力和同一人物と思われる、脇忠重の弟他三郎が明治元年六月に一代限り八石五斗で召し出されていることが記されている。明治四年段階で三十二歳であることも記されている。また、同時代の彦根藩職員を記した史料「職員」には、学校の項目で副教授をつとめる四名の内の一人である。この協力についても、江戸で洋学を学んだ事は史料からうかがえるが、順天堂で学んだことまでの追跡はできなかった。

「庄内 大井英之助」

庄内藩酒井家の慶応四年の分限帳によると、「御医師 百二十石

大井周敬」「御医師 五人扶持 大井恵益」「御医師格 三人扶持 大井有格」という三名の大井姓の庄内藩医がでてくる。大井恵益は一代の取り立てであり、大井恵益の嫡子が有格との記載がある。そのため庄内藩医の大井家は二家である。また、明治二十年の西田川郡郷村の医師名のなかに、早田村の医師として大井友益という人名が出てくる。⁽⁶³⁾名前に「益」の字を使っていることから、大井恵益につながる人物と考えられる。

以上の史料からは大井英之助の名前は見いだせないが、庄内藩医の大井家の一族に結び付く可能性はある。

「阿州藩 竹中銀之進」

阿波藩蜂須賀家中には、竹中富太郎家(百石)、竹中万平家(七石四人扶持)、竹中又左衛門家(十石五人扶持)がある。⁽⁶⁴⁾

この諸家には医師の家系はなく、竹中銀之進がどの家の出身かは不明である。

「江都 河合詮吉郎」

不明。

「若州藩 井坂静太郎正名」

若狭小浜藩士に井坂姓がなく不明。⁽⁶⁵⁾

「武州杉戸 菅原寿喜代」

武州杉戸とは日光道中杉戸宿のことであるが、現在菅原姓はなく不明である。⁽⁶⁶⁾

「江都 河亘」

不明。

以上、十二名の門人はいままで門人としては知られていなかった人名である。経歴が不明な人物については、今後の検討課題として追跡してゆきたい。

おわりに

本稿では、佐倉順天堂の門人帳『佐倉順天塾社中姓名録』にでてくる門人たちについて、全国各地に対する追跡調査をもとにしたものである。門人たちは全国各地に点在していることから、その所在と各自の事蹟の把握に終始してしまった感がある。

ただ、二名の門人「西友輔」「塚原周造」については関係史料を確認することができた。今後は、門人の所在調査で得られた結果をもとにして、順天堂塾の門人の具体的な姿についてアプローチできる史料を発掘できたらと考えている。

順天堂の門人については、出身地が不明で人名のみ知られているもの

が多い。この「地域蘭学の総合研究」の一環として作成を進めている蘭学塾門人帳データベースを活用することによって、今後門人調査における新たな可能性が開けてゆくと考えている。

註

- (1) 昭和五十五年五月、学校法人順天堂発行。
- (2) この門人名は明治十六年七月に谷中墓地に建立された「佐藤尚中先生頌徳碑」の裏面に刻まれた建設の発起人や寄付者としての門人名などをもとにしていると思われる。ただし、同一人物で改名したものを別の人物として二重に記載した例もあるので注意が必要である。
- (3) 順天堂大学医史学研究室蔵。
- (4) 平成八年三月、佐倉日蘭協会発行。調査や編集について筆者が担当した。
- (5) 「岩手県医師会史」下巻。
- (6) 同右。
- (7) 『遠田郡医師会史』昭和五十八年、湧谷町教育委員会提供。
- (8) 『遠田郡医師会史』。
- (9) 免許状を子孫である島田誉志男氏が所蔵されている。
- (10) 富岡市教育委員会提供資料。
- (11) 館林教育委員会提供資料。
- (12) 『足利市医師会史』通史編、平成三年、足利市医師会発行。
- (13) 岩井市教育委員会提供資料『岩井市資料目録第一集 高野みつ江家文書』参照。
- (14) 『吉田町史』吉田町教育委員会、昭和五十七年。以下の岩崎隆道関係資料は吉田町新井政幸氏のご教示による。
- (15) 『田中千弥日記（明治辛未帖）』吉田町教育委員会、昭和四十三年。
- (16) 「岩崎隆道翁墓」銘文。
- (17) 木曾福島町教育委員会提供資料。
- (18) 高遠町図書館所蔵、高遠町教育委員会提供。
- (19) 亀田町教育委員会提供資料による。
- (20) 亀田町教育委員会のご教示による。
- (21) 『福井県医師会史 第二巻・資料編』
- (22) 『福井県医学史』昭和四十三年、『福井県医師会史（第二巻・資料編）』昭和六十六年、『寛政改御家人帳 三之上』（『鯖江市史』第五巻）。
- (23) 「天保改小頭以下代数書 六」（『鯖江市史』第六巻）。
- (24) 「府中本多家家臣録（二）」所収。

- (25) 安田仁一郎著、昭和六年五月発行。
 - (26) 『滋賀県医師会七十年史』。
 - (27) 伊良子光義「明治初年における滋賀県の医学教育について 附村治重厚氏の略伝」(『医譚復刊』九)、『滋賀県医師会七十年史』『滋賀県医師会創設百周年記念史』。
 - (28) 和泉市教育委員会所蔵杉浦家史料。
 - (29) 米田正治『松江文庫4 続島根医家列伝』昭和五十三年。
 - (30) 大塚益郎『井原後月人物誌』昭和五十七年。
 - (31) 芳井町立歴史民俗資料館の提供資料によると、菩提寺である妙善寺に墓所があり、その経歴を知ることができるという。
 - (32) 『蘭医佐藤泰然』一三二頁の門人名一覽。
 - (33) 『窪田亮貞日記』(広島県歴史博物館窪田家文書)の明治五年九月二十七日の条には窪田堅三が九月二十日に死去したとの記事が出ている(広島県歴史博物館『医師窪田次郎の自由民権運動』二五頁)。
 - (34) 有元正雄他著『明治期地方啓蒙思想家の研究―窪田次郎の思想と行動―』溪本社、昭和五十六年。
 - (35) 福田家資料24-1、福山城博物館提供。
 - (36) 『肥後医育史』(昭和五十一年二月)、『隈本古城史』(昭和五十九年十一月熊本県立第一高等学校)、『熊本市医師会史』(昭和五十二年)。
 - (37) 日産厚生会佐倉厚生園所蔵、佐倉市寄託、雄松堂マイクロフィルム版によった。
 - (38) 千葉県立佐倉高等学校鹿山文庫所蔵。
 - (39) 日産厚生会佐倉厚生園所蔵、佐倉市寄託「保受録」及び「分限帳」。
 - (40) 同右。
 - (41) 西美江家文書。
 - (42) この署名は『蘭医佐藤泰然』六三頁にも写真が掲載されている。
 - (43) 註(37)と同じ。
 - (44) 津山洋学資料館長下山純正氏のご教示による。
 - (45) 鈴木秀幸「地方史と大学史―茨城県千代川村における明治青年の夢を追って―」(『地方史研究』二九七、二〇〇二年六月)。
 - (46) 大正十四年五月に彼の海事関係五十年記念祝賀会委員によって制作された。
 - (47) 『塚原夢舟翁』の記載では文久三年に入門とあるが、実際は元治元年の入門である。
 - (48) 塚原宏一家文書、元治元年十月一日(二年正月二十九日)の記載がある。鈴木秀幸氏のご教示による。塚原周造関係史料の閲覧にあたっては、千代川村史編さん室赤井博之氏にご配慮をいただいた。
 - (49) 千原貫一は、現在の岡山県井原市出身の門人。
 - (50) 塚原宏一家文書。
 - (51) 「順天堂の創立と其堂号の由来について、並佐倉順天堂塾生々活の一般」(『順天堂医事研究会雑誌』五二五)。
 - (52) 「ゾンタク」とは「ドンタク」と同意で、「休日」の意味である。『日本国語大辞典』第二版、第八巻。
 - (53) 『蘭医佐藤泰然』。
 - (54) 『日本国語大辞典』第二版、第一巻、小学館、二〇〇一年。
 - (55) 塚原宏一家文書。
 - (56) 『順天堂史』上巻。
 - (57) 『太田市史 史料編 近現代』には、明治三十七年に足袋商として名前が出てくる。
 - (58) 富岡牛松著『金山太田誌』(昭和九年)。太田市教育委員会文化財課穴原氏の提供による。
 - (59) 小浜市教育委員会提供史料。
 - (60) 彦根城博物館所蔵、『侍中由緒帳』第七刊として翻刻。彦根城博物館史料課野田浩子氏のご教示による。
 - (61) 彦根城博物館所蔵、重要文化財「井伊家文書」。
 - (62) 鶴岡市郷土資料館秋保良氏提供「莊内史要覧」所収。
 - (63) 『鶴岡地区医師会百年史』。
 - (64) 『徳島藩士譜』中巻、昭和四十七年、徳島藩士譜刊行会。徳島城博物館須藤茂樹氏のご教示による。
 - (65) 杉戸町教育委員会からの情報による。
 - (66) 小浜市教育委員会からの情報による。
- 〔付記〕
- 本稿を成すにあたって使用した順天堂の門人のアンケート調査およびそのまとめは、筆者が佐倉市教育委員会在職中の業務として行ったものである。当時収集した資料を使用させていただいた佐倉市教育委員会文化課に感謝したい。
- また、順天堂門人である西友輔関係資料の調査では所蔵者である西美江氏、西一雄氏にお世話になった。塚原周造関係資料の調査については所蔵者である塚原宏一氏、千代川村史編さん専門委員会委員長鈴木秀幸氏、千代川村史編さん室の赤井博之氏にお世話になった。記して感謝したい。
- (佐倉市役所市史編さん室、国立歴史民俗博物館共同研究員)
- (二〇〇三年五月六日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了)

Students of the Sakura Juntendo and Their Spread: Students from Its Student Records and a Study of These Materials

TOSA Hirofumi

Many students from around Japan thought to number in their thousands gathered at Sakura Juntendo, a school of Western medicine opened in Motomachi, Sakura by Sato Taizen, a practitioner of Western medicine. Still, apart from some well-known figures, an overall picture of the school is not necessarily clear. Just as in the case of Ogata Koan's Tekijuku, another medical school in Osaka, this is due to constraints relating to historical materials because of the lack of extant student records covering its entire history. Although many of the student's names have been cited in Ichiro Murakami's "Ran'i Sato Taizen" (The Western Physician Sato Taizen), the absence of records of their place of origin makes it difficult to undertake a survey to track down these students.

It is under such circumstances that this paper presents the situation of students for a certain period, for which the recording of places of origin for these students is indeed valuable. Thus, this paper introduces students for which details are available and examines their diffusion throughout the country on the basis of the findings of a survey undertaken on students who were recorded in the Sakura Juntenjuku Shachu Seimeiroku (Juntendo School Register of Names) dating from May 1865.

This paper also introduces historical materials related to Nishi Tomosuke, a physician for the Sakura feudal domain who was active as a military physician in the Meiji Period, and Tsukahara Shuzo, a native of Chiyokawa village in Ibaraki Prefecture who was an official during the Meiji Period. In the case of both these students it was possible through the survey to confirm the whereabouts of their descendants.

Lastly, I introduce the Juntenjuku Seimeiroku (Junten School Name Register) which was found among materials relating to Tsukahara Shuzo in the course of the survey and which he is believed to have compiled while at Juntendo. This has been used to make a study by conducting a comparative study with student records whose existence has been known about for some time.